

男性の育児休暇について、改めて考えてみませんか？

子どもを連れて、全国講演を行った社会学者が語る、ジェンダー論 (2000年代)



お笑いジェンダー論

2001年 勁草書房

瀬地山 角 (著)

[400-3]



著者紹介【社会学者】

1963年奈良県に生まれる。1993年東京大学大学院博士課程修了。東京大学大学院総合文化研究科教授。留学中のアメリカで妻の出産に立ち会い、子育てパパをスタート。以来、育児を始め、家事全般を夫婦で分担。子連れ留学で父子家庭を経験。

大阪弁で書かれた本書、I部はテーマとなった「お笑いジェンダー論」、II部はそれまでに連載されたエッセイや小論、III部は「セックスワーク論」、IV部はI部の論点でもある専業主婦優遇制度の改革についてのより踏み込んだ論文が収録されている。

それぞれが独立していてどこからでも読める。

大学の先生の「論文」だが、『大阪弁のお約束』でオチがついていて思わず笑えてしまうところもある。

特にII部のエッセイには、書かれた頃の流行語や世相が凝縮にみられ、当時を知る者には懐かしい感じがするだろう。

『ジェンダー論』というと「男とは、女とは…」という入り口だが、人の生存・存続の根幹の問題を論じることである。

2020年には高齢化で大変なことになる、とまるで「今」を見てきたような「高齢化社会への提案」は特に興味深い。

今やっとなら対策の緒に就いたこれらの問題は、さて20年後にはなんとかなっていつているのだろうか？

大阪弁で面白おかしく、まじめな話をくそまじめに論じている本書は、難しい話いやだという方にも、

まじめな話でないといやだという方にもおすすめ！（ルナ）

勤務病院を退職して、育児・家事に専念した医師が語る、イクメン生活 (2010年代)



男が育休を取って

わかったこと

2014年 セブン&アイ出版

池田 大志 (著)

[900-6]



著者紹介【皮膚科医師】

1977年兵庫県に生まれる。2004年徳島大学医学部卒業。形成外科医を経て2010年より現職。2010年5月～10月まで育児休暇取得。乳腺外科医の妻と共に働きながら二児の育児を継続。育児経験を生かし石鹸を使わない「池田流ベビースキンケア」を推奨。

「日々成長する娘のこの瞬間を見逃したくない」と、多忙な毎日を過ごす皮膚科医が半年間の育児休暇取得を申請した。

出産・育児は女性が担うものとの意識著しい2010年代、果たして許可は得られるのか？ドキドキしながら上司の返答を待つ彼に返ってきたのは「ラブリーだね」という温かい許可の言葉だった。「やった～！待望のイクメン生活だ！」。しかし…。

始めてみて初めてわかる、想像以上の育児の負担。育児ノイローゼに陥りそうになった著者は自身の体験を踏まえて、男性の育児教育の重要性を改めて提唱する。「既婚未婚にかかわらず、教育を受けておくことが育児休暇取得の自然な流れになる」と。

本書は妻の職場復帰に伴い、長女生後7か月から1歳までの期間を退職して、育児・家事に取り組んだ新米パパの記録である。

ごみ出し、料理、洗濯、他、諸々の家事の多忙さに加えて、泣き止まない娘に為すすべなく精神的に追い込まれる場面など、初めての体験に戸惑う姿がリアルに語られている。働き盛りの男性が昼間子どもを抱いて買い物に出かける姿は

当時めずらしく、時には不審者のように見られながらも、著者は育児を通して得た貴重な体験を医学に活かして

いく。だれもが当たり前前に育児休暇を取得できる社会を目指して、2020年を始めよう！（みっと）